

50613

教科書文庫

5-
810
44-1947
01304 49564

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

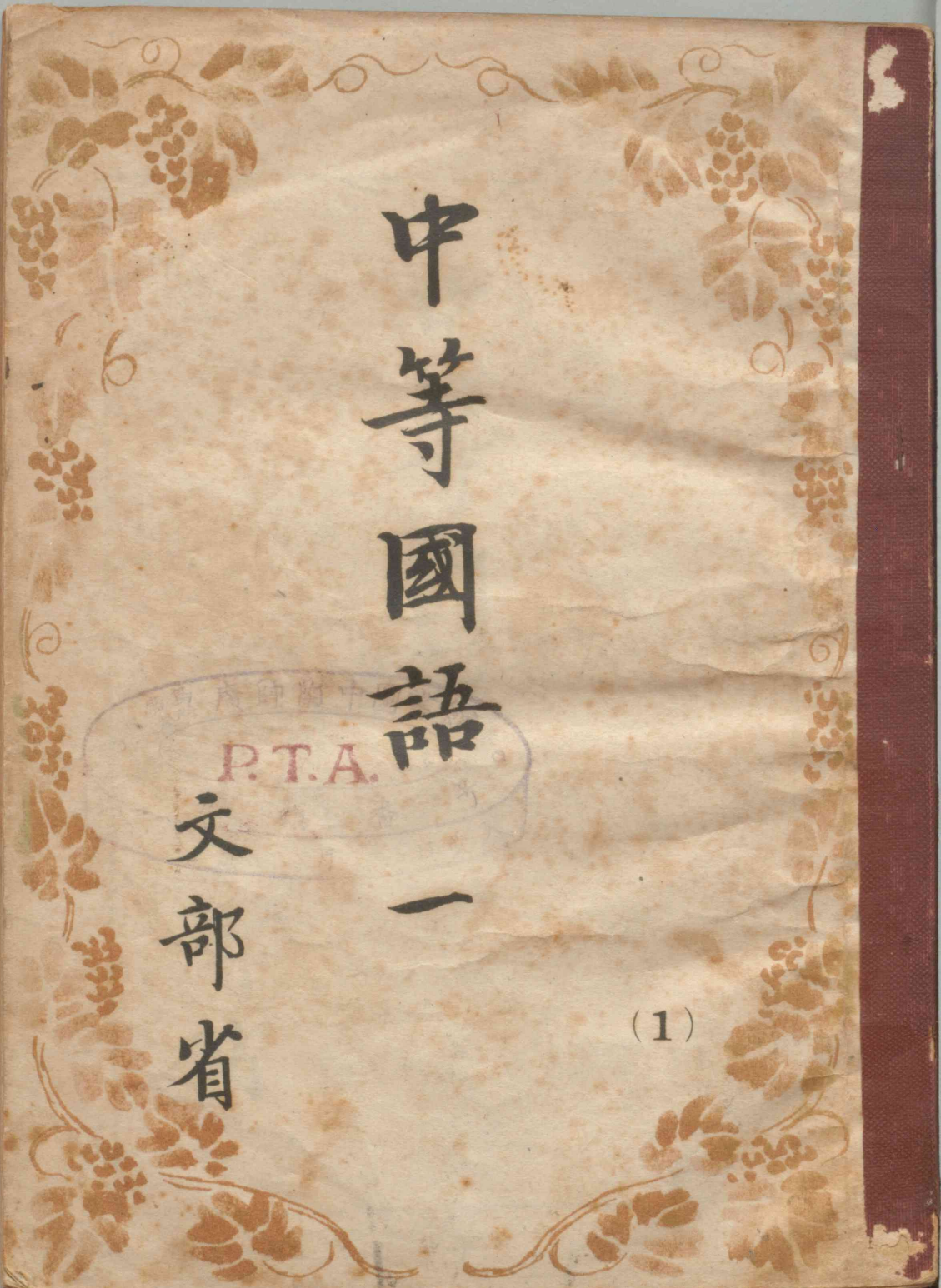
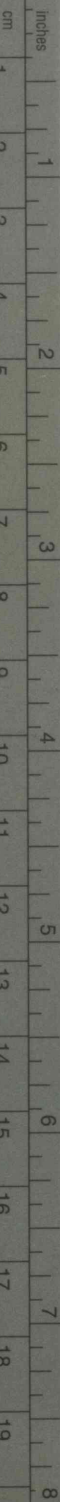


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



中等國語

P.T.A.

文部省

(1)



中等國語

文
部
省



(1)

中央図書館

中央図書館

文庫

目録

一	第一歩	一
二	世界をつなぐもの	三
三	雨にもまけず	十一
四	おはよう	十三
五	昆虫記	十六
六	潮目	二十二
七	日記から	二十六
八	初夏の奈良	二十八
九	りすを育てる	三十一
十	末ひろがり	四十六
十一	涼み台	五十三

広島大学図書

0130449564



一 第一歩

この「よびかけ」の演出は、みんなでくふうしよう。

「新しい道、」

「明かるい光にみちた道、」

「希望にみちた、たのしい出発。」

「たのしい出発。」

「私たちは、その第一歩をふみ出そうとしている。」

「さ、自分の進む道を力強くふみ出そう。」

「ふみ出そう。」

「道ばたの名もない草を、時には、ながめ、」

「途中で弱った友だちがいたら、手を取りあって、」

「川があれば、橋をかけ、」

「夜道になれば、ひをか、げ、」

「みんないたわりあって、」

「みんな、たのしく、」

「自分のえらんだ道をふみ出そう。」
「ふみ出そう。」

「あ、希望は、めい／＼の胸に、」

「ほのおのように燃えあがる。」

「——燃えあがる。」

「雲のようにひろがる。」

「——ひろがる。」

「さあ、でかけよう。」

「足並みそろえて。」

「もしも、——」

「あらしがおそって来たたら、」

「もしも、——」

「難路にさしかかったら、」

「その時は、」

「みんな呼びあって、」

「励ましあって、」

「そうだ、愛をもって、」

「ほんとうの愛をもって、」

「つきぬいて進もう。」

「きりぬけて進もう。」

「さ、出かけよう。」

「足並みそろえて、」

「若々しい人生行路、」

「おごそかな第一歩、」

「第一歩。」

二 世界をつなぐもの

少年赤十字

「平和の光うら／＼かに、廣き世界を照らしつゝ、輝く日にもたぐうべき、あつき恵みと博愛の、情
いやますわがつどい、これぞ少年赤十字。」

私たちはこの歌をうたいながら、團員としてのつとめを果たしています。
つとめの第一は、だれでも愛するということです。お互に尊敬しあい、自分が苦しんでも、ほかの

人を助けてやることです。自分がぎせいになることすら覚悟しなければなりません。

その第二は、健康を保つばかりでなく、これを増すことであります。いくら、いいことをしようと思っても、からだが弱くては、何事もできるものではありません。からだをじょうぶにしておいて、いざという時に、十分働けるように心がけています。毎日の生活を規則正しくするのも、衛生に注意するのも、この念願にほかなりません。

第三は、海外の少年少女となかよくすることであります。今や世界は、全く平和になりました。ことに日本は、戦争というものを永久にひき起さないということをかきました。こうなりますと、いよいよ国際親善の道がひらかれなければなりません。それで、私たちは一日も早く国際的教養を身につけることがたいせつです。この三つのつとめを果たすために、團員たちはいろいろの行事を考えています。

毎年春になりますと、小鳥の巣をこしらえて、これを林や森に持って行って、幹や枝などにるなえつけてやります。小鳥たちは、いつのまにかこの中に巣を作って、卵をうみ、ひなをかえし、親子そろって住みつくのです。これも行事の一つです。

あちこちの國から、花の種子を送ってもらったこともあります。そして、それをまいて、花園を作りました。種子は、みんな芽を出し、花を咲かせました。世界じゅうのなかまの美しい心が、咲きそろうたように花園はりっばでした。

その後日本の花の種子も、方々の國々に送り届けました。その種子も世界のあちこちの土地で、花を咲かせました。これも美しい仕事でした。

それからまた、国際通信交換をします。これによって、お互の國のことを知りあうばかりでなく、見知らぬ國の少年少女たちと親しみあうようになります。いわば國境を越えた奉仕の心が、大きな行事ともなっています。

「平和の光うらゝかに、廣き世界を照らしつゝ、輝く日にもたぐうべき、あつき恵みと博愛の、情いやますわがつどい、これぞ少年赤十字。」

私たちはこの歌に生き、この歌を生かそうと、その日その日の仕事を果たしています。

國際語

ヨーロッパ大陸の中央を東から西北へ貫ぬくカルパチア山脈の北に、バルト海へ注ぐヴィスツラ川をはさんで、はてしなくひろがる緑の平野がある。

十世紀のころ、この豊かな土地に、ポーランド人が王國を建てた。それからおよそ一千年、この國は幾たびか栄え、幾たびか衰えたが、その浮き沈みにつれて、幾つもの民族が、こゝにおちあつた。十八世紀の末、王國が亡んで、その領土がロシア・プロシア・オーストリアの三國に分割されたころには、ポーランド人のほかに、リトワニア人・ユダヤ人・ロシア人・ウクライナ人・トルコ人などが、國じゅうの町や村に入りまじって住んでいた。

これらの民族はそれぞれ顔つきが違ってはいるばかりでなく、ことばも、宗教も、風俗や習慣も異なっていた。

こうした國に、感じやすい心の持ち主が生まれたならば、どういふことになるであらうか。

一八五九年の暮れ近く、ピアリストク市に生まれたルドヴィコルザメンホフは、そうした人物のひとりであつた。

ピアリストク市はロシア領にあつて、こゝにポーランド人の地主、ドイツ人の技術者、ユダヤ人の商人などが古くから住んでおり、それをロシア人の役人が治めていた。

心やさしい母に育てられ、人間はみな兄弟であると教えられたザメンホフの胸の中には、早くから人類に対する愛情がめざめ、はぐくまれていた。

けれども、日ごとにかれが町で出会う人たちは、人間という兄弟どうしではなかつた。ポーランド人・ロシア人・ドイツ人・ユダヤ人という他人どうしに過ぎなかつた。しかも、互になかのわるい他人であつた。

はげしい争いも絶えなかつた。ことの起りは、いつもつまらぬきつかけからであつた。例えば、市場の人ごみの中でドイツ人がポーランド人につきあたる。それだけのことから、ごた／＼が始まり、しまいには、みなりのまち／＼な人々が入り乱れて、互にわからぬことばでわめきながら、打つ、けるのさわぎにもなる。

そうしたありさまを見るたびに、ザメンホフの心は痛んだ。しかし、かれの心は痛むだけにはとまらなかつた。幼いながら、そうした出来事のほんとうの原因をつきとめようとした。更に、そのつきとめた原因を取り除きたいと考えるにいたつた。

同じまちに住む人たちのなかつた原因は、つきつめれば、風俗や習慣が異なり、ことばや宗教が違ふところにあるのではなからうか。こゝに気づいたザメンホフの頭の中には、やがてこの原因を取り除くふすが、あれこれと浮かんで来た。大人になつたら、これらの計画を実現させよう。けれども、年をとるにしたがつて、いろ／＼の夢は次々に消えて行つた。たゞ一つを残して。たゞ一つ、それだけは心の底にこびりついて、いつまでも離れなかつた。それは人類共通のことばについてであつた。

ことばのまち／＼なことが、何よりも大きな、外国人どうしの憎しみの原因なのだ。ザメンホフはそう考えた。このことばの違いをなくさなければならぬ。人類に共通のことばがあつたなら。ポーランド人にも、ロシア人にも、ユダヤ人にも、ドイツ人にも、だれにもわかることばさえあつたなら。そうした人類共通のことばの使われる時代が来たならば、地球の上に、人間はだれもが互に理解しあうことができ、民族と民族との間のわだかまりも溶けうせて、世界は平和になるに違ひない。そうだ、こればかりは実現しなければならぬ。

中学校にはいると、ザメンホフはいろ／＼なことを熱心に勉強した。そのあげく、かれは、どの民族に対しても公平であり、だれにも学びやすいことばを自分で作りあげようと思ひつた。

学校での成績はいつも一番であつたが、勉強のかたわら、共通語を作る仕事を続けた。その仕事は、一八七八年、中学校生活最後の学年にひとまず完成した。この年十二月五日、ザメンホフ家に数人の中学生が集まつて新しいことばの誕生を祝い、このことばで作つた歌をうたつた。

民族のあいだの憎しみは、
たおれよ、たおれよ、時は来た。

人類はみな心を合わせ

ひとつ家族にならねばならぬ。

そののち、いろ／＼のいきさつがあつたが、ザメンホフは、自分の作つたことばを絶えずみがきあげ、ついに一八八七年七月、これに「國際語」という名まえをつけて、世界に発表した。これが、のちにエスペラントと呼ばれるようになったことばである。

こののち、ザメンホフは、一九一七年ワルシャワでなくなるまでの一生を、この人類共通語としてかれの作つたことばのためにさへげた。

ノーベル賞

先日新聞に、一九四六年度のノーベル賞の文学賞が、ドイツの詩人、ヘルマン・ヘッセという人におくられたと報ぜられていました。そうして、このノーベル賞は、その年に、人類の文化や世界の平和のため、一番大きな功績を残した人におくられる、最も名誉ある賞だと説明してありました。

ノーベル賞のことは、前から聞いていたのですが、どんなものであるかということとは、よく知りませんでした。この機会にできるだけ調べておきたいと思つて、いろ／＼の本を読んでみました。

ノーベル賞というのは、スウェーデンのアルフレッド・ノーベルという科学者の遺言によつてできたもので、物理賞・化学賞・生理学および医学賞・文学賞・平和賞の五つに分かれています。そうして、その年に、科学の上で重要な発明や発見をしたり、すぐれた文学作品を書いたり、國際間の親善に盡くし、世界平和のために骨折つたりした人々におくられるのです。

ノーベルがスウェーデン人であるから、スウェーデン人だけに與えられるというのではなくて、どこの國の人であつても、その人のしたりつばな仕事に対して與えられる光榮あるしるしです。これをもたらした人は、世界的に偉大な人という折り紙をつけられたことになりました。

一九〇一年に第一回の授賞が行われてから今日まで、すでに二百名以上の人が授賞せられています。その中には、X線を発明したレントゲンとか、ラジウムを発見したキュリー夫人とか、あるいは、「青い鳥」を書いたメーテルリンクなどの名があります。

それでは、このノーベル賞を生んだノーベルとはどんな人であつたでしょう。

ノーベルはスウェーデンに生まれた科学者で、今から五十年ほど前に六十三歳でなくなっています。ダイナマイトを発明し、それを製造する会社を、世界の各國につくつて経営しましたので、世界の火薬王と呼ばれていました。

ダイナマイトは、その強力な爆発力を利用して岩石をくだいて、トンネルを掘つたり、運河を開いたり、鉱山で鉱石を採掘したりする時に使われます。ダイナマイトの発明のおかげで、土木事業や、地下資源の開発が、どんなに多くの利益を得たことでしょう。

ところが、それが兵器として使われるようになり、そのために多くの人命が失われ、文化が破壊される結果となりました。これは、おそらくノーベルの願つていたところではありますまい。

ノーベルは生まれつきやさしい人で、父母や兄弟に対していつも心から忠実でした。外國に出ているがしい仕事に従事している時でも、母の誕生日には、わざわざ老母のもとに帰つてお祝いするのを樂しみにしていました。また、世の中の困っている人たちのために、自分の収入のすべてを與えたこともありました。

このように、世の中の人に対する慈愛の心の強かった人ですから、自分の発明したダイナマイトが、人間の生命を奪い、文化をこわす結果になったことをたいへん悲しみました。それで、死ぬ時、自分の財産の全部を出して、人類に大きな幸福をもたらしたものに與えるようにと遺言しました。この美しい遺志によって生まれたのが、今のノーベル賞であります。

終りに、ノーベルの人がらがわかる一つの話を書きましょう。

ノーベルがバリーにいたところのことです。冬の寒いある日のこと、街頭でひとりのスウェーデンの婦人に会いました。同国人のよしみで、ふと、とりかわした一言のあいさつから、ノーベルは、その婦人がよるべのない、きのどくな身の上であることを知りました。そこで、ノーベルはその婦人のために、ある寺院の小さな雑役の仕事を見つけてやりました。この親切な行爲に対して、婦人は次のような感謝の手紙をしました、めています。

「ノーベルさま。あなたは、私の一生の恩人でございます。

あなたにお目にかゝるまで、私はだれからも一言の親切なことばも與えられませんでした。

あの時、私は、たゞ一言、通りすがりのごあいさつを申しあげただけでございました。再び「今日は。」と申しあげる機会が來ることさえ予期していませんでした。それなのに、あなたは仕事までお與えくださいました。

助かりました。私ほとびたつ思いでございます。この喜び、この感謝——これをどう申しあげたらよいでしょう。たゞ神様のみまえにひざまずくばかりでござります。」

ノーベルの机上には、このような感謝の手紙が絶えなかつたということです。

三 雨にもまけず

雨にもまけず、

風にもまけず、

雪にも夏の暑さにもまけぬ、

じょうぶなからだをもち、

欲はなく、

けっして怒らず、

いつもしずかに笑っている。

一日に玄米三合と、

みをと少しの野菜をたべ、

あらゆることを、

じぶんをかんじょうに入れずに、

よくみききしわかり、

そしてわすれず、

野原の松の林の陰の、

小さなかやぶきの小屋にいて、

東に病氣のこともあれば、
行って看病してやり、
西につかれた母あれば、
行ってその稻のたばを負い、
南に死にそうな人あれば、
行ってこわがらなくてもいいと言ひ、
北にけんかやしょうがあれば、
つまらないからやめろと言ひ、
ひでりのときはなみだを流し、
寒さの夏はおろ／＼あるき、
みんなにでくのぼろとよばれ、
ほめられもせず、
くにもされず、
そういうものに、
わたしは、
なりたひ。

(宮沢賢治の作による)

四 おはよう

生きたことば

四月はじめのある朝、私はいつものように電車からおりて、春らしい日ざしを楽しみながら、ゆっくりに学校の方へ歩いて行った。

途中、公園のさくら並木を通り越して舗装道路にさしかかったころ、ひとりの生徒が私のそばを急ぎ足で通り過ぎた。うしろ姿を見ると、まだ制服もま新しい、入学したばかりの生徒である。まもなくまた私のうしろから来た生徒が、私を追い越そうとして、「おはようございます。」とあいさつした。見ると、五年生のひとりである。すると、さきに追い越した新入生が、何を思ったか急に立ちどまり、道の左側に直立している。そして、私が近づくに脱帽して、「おはようございます。」と言う。私も「おはよう。」とあいさつを返した。すると、私の声の終るか終らないうちに、かれは再び語を發して、「先生、私はさつき先生だということを知りませんでした。」と言って頭をさげた。「あ、そう。」と言ひながら思わず私も頭をさげた。

「先生に対し、学友に対し、必ずはっきりことばに出してあいさつせよ。」とは学校の平素の教育である。この新入生も、さつきこの教育を受けたのであろう。そして、ひとりの先生に対してその礼を欠いたと気づいた時、直ちにその気づいた場所に立ちどまって待ち受け、あいさつを果たし、さきの欠礼を謝したものとみえる。

考えてみると、うらやましい行動である。だれでも、自分のしたことが誤っていたと知った時、これほどこだわりなくその非を認め、これほどはっきりとその非を改めることができたなら、どんなに幸福であろうか。私は明かるくされた心持で、学校の門をはいった。

その後も、私は時々このことを思い出す。そして、あの少年のいちずな顔と、はりきった声とを。あり／＼と見聞くように感じるとともに、一先生だということを知りませんでした。」という、力あることばを思い返さずにはいられない。

実際、こういうのちの底から押し出して来たようなことばには、不思議に人の心を明かるくする力がある。時に、氷のように固くとざした人の心をも、一瞬に溶かしやわらげるのは、こういうことばである。しかもそれは、聞く人の心を動かすだけではなく、もつと直接に、それを発した人の心を開拓し、その最も深い、最も眞実な人間性を鼓舞し、開発するものである。このように、いのちがそのまゝのことばに現われ、ことばが直ちにいのちそのものであるような域にいたって、はじめてことばが直ちに生きたことばになるといえるよう。さきの新入生の場合においては、それはおそらく少年らしい純眞さの現われであったであろう。しかし、われ／＼は話す働きをねることによって、こういう生きたことばをますます養い育てて行くことができるのである。

國語の学習においては、論文も随筆も小説も読まなくてはならぬ。歌も句も詩も読まなくてはならぬ。文もつゞらなくてはならぬ。しかも、それだけで、談話や問答やあいさつのような、日常のことばをおろそかにしたならば、その学習は、根のない植物を育てようとするに等しく、眞の國語力の成長を見ることはできないであろう。

われ／＼は、何よりもまず、われ／＼自身のことばを生きたことばたらしめることによって、われわれの心をひらき、いのちを向上させなくてはならぬ。そしてそれが、文を読むことに対して、眞の基礎であることを自覚しなくてはならぬ。

(西尾実の文による)

おはよう

みよ、

太陽はいま世界のはてからのぼるところだ。

この朝霧のまちと家々、

この朝あけのするどい光線。

まず木々のこずえのてっぺんから、

新鮮なこゝろをあたえる

みず／＼しい空よ。

からすがなき、

すゝめがなき、

ひと／＼はかっきりと目ざめ、

おきでて、

そうして言う。

「おはよう。」

「おはよう。」と。

よろこびと力に満ちてはつきりと。

お、このことは生きています。

なんと美しいことばであろう。

このことばから人間の一日ははじまる。

(山村暮鳥の作による)

五 昆虫記

日が暮れかゝると、井戸掘りさいちゅうの「じがばち」は、石のふたで戸締まりをして工事場から出て行く。そして花から花を追いながら、どこかへ行ってしまう。が、その翌日は、前日掘っておいた住まいに、青虫を持ってちゃんとどつて来る。また「はなだかばち」は、獲物をかついで、砂でふさがれてその辺一帯の砂地と見わけのつかなくなっている玄関口に、いつもびたりとおり立つ。かれらの一べつとその記憶とは、あやまつことのない確かさがある。いわば昆虫には、われ／＼にはそれに似寄ったものもない一種の方位感、私がかりに記憶と呼んでおく一つの能力があるともいえよう。記憶と呼んだのは、ほかになんとも言い表わしようがないからだ。私はできるなら、昆虫心理学のこの点に幾らかでも光明を投じようと、ひとわたり実験を施してみた。

最初の実験の相手は「こぶつちすがり」。朝の十時ごろ、同じ傾斜地の上、同じ部落で、巢穴の穴掘りや庫入れにいそしんでいた雌を十二匹捕らえて来た。おの／＼のとりこは別々に紙袋に閉じこめられ、一つの箱の中に入れられる。そして巢の敷地から二キロメートルばかり離れた所に放たれる。もちろん、私はその前に、あとで見分けられるように、不変色の絵の具で胸の中央に白点をつけておくことを忘れなかった。

このほちは、いろんな方向に向かってちょっと飛び立ち、草の葉の上に足をとどめ、太陽がまぶしいのか、しばらく前あして目をこすっている。それから、少しも迷わずに、南の方、かれらの住まいの方向をさして急ぐのだった。五時間後、私は巢の共同敷地にもどってみた。そして白いしるしのついた「つちすがり」が二匹、もう仕事をしているのを見つけた。まもなく、第三のものが足に「ざるむし」をさげて野から帰って来た。それから第四のものがその後について来た。四匹のほちがやりお、せたことは、おそらく他のものも、もうとつくに成しとげてしまったか、でなければ、これからやりお、せるであろう。

しかし、半径二キロメートルほどの所は、多かれ少なかれ、かれらに知られているということもあり得よう。私は距離をもっと遠くして、このほちが知っているとはとうてい思われなような出発点で、もう一度実験をやりなおす必要がある。

そこで、その朝材料を捕らえて来た同じ巢穴の群れから、私は九匹の「つちすがり」の雌を捕らえた。選ばれた出発点は、巢穴から三キロメートルばかり北にある隣町だ。もうだいぶんおそくなったので、ほちは運ばれて来た箱の中で夜を過ごすことになった。

翌日の朝八時ごろ、私は今度は白点を二つずつ胸につけて、それから、一匹ずつ町のまんなかで放

してやった。放された「つちすがり」は、最初二列の家並みの間をまっすぐに空にのぼって行くのだ。ちょうど、町の混雑をできるだけ早くのがれて、広い地平線を望み得る点にのぼろうとでもするかのように。それから屋根を見おろして、すぐに元気に、南をさして矢のように飛んで行った。明くる日私が巢穴を訪問すると、胸に二重の白点をつけた「つちすがり」が五匹、何の変事も起らなかったかのように、工事場で元氣よく働いていた。

こうしてかれらが突然思いがけぬ遠方に運ばれた時、かれらは巢穴にもどるために、記憶をたどっているのだろうか。かれらがある高さのところのぼって、そこからある目標点を定めて、巢のある方へ全飛行力をあげて飛んで行く時、はじめて見る野を越え山を越えて、空中に手を標識づけてくれるのは記憶だろうか。明らかに、そうではない。はちは今いる場所を知らないのだ。またどっちの方から連れて來られたかも教えられていないのだ。旅行はまっくらな箱の中で行われたのだ。けれども、かれらは自分が今どこにいるかがわかる。かれらは、だから單なる記憶より以上のものに導かれている。つまり、かれらは、特別な能力、一種の方位感を持っているに違いない。

私は、この能力がどのくらい鋭く正確であるか、またその働く常の條件から離れねばならない時、それはどのくらいにぶいものであるかを、実験によって証明してみよう。

幼虫への食料補給をやっていた一匹の「はなだかばち」が、巢穴から出て行った。かれは、もう少したつと、また餌の獲物を持ってやってくるだろう。巢穴の入口は、虫が出かける前、あとずさりには掃いて砂で念入りにふさがれる。けれどもかれは帰って來るや、上に述べたように、一つの勘でもってその戸口を見つける。

何かくふうしてごまかしてみようかと、私は入口をてのひらぐらいの平石でおくってやった。やがてはちはもどって來た。しかし、留守中に起った大変化は、かれを少しも迷わせなかった。かれはすぐ石の上におりて、その上をあらゆるちからかけまわり、まわりをまわってみて、その下にくぐりこんで、びつたりと巢穴のある方向に土掘りをやりだした。

そこで私は、はちを追い拂って置いて、今度は近くにあってはふんを切ってごまかにして、それを厚さ二、三寸ばかりの層に、巢穴の入口とそのあたり一帯にまいた。その色合いと、材料の性質と、ばふんのにおいとがいっしょになつてはちを惑わせるだろう。まさかこの汚物をわが家の玄関口だと見たりはしない。やがて帰って來たはちは、高みから敷地の見えない状態を調べ／＼して、あやまたずこの層の中心、入口の正面にびつたりとおり立つ。発掘する。回廊の口はそこにすぐに見つけられる。私はもう一度はちを遠くへ追い拂った。

折よくも、私はエーテルの小さなびんを持っていた。そこで掘げたばふんを拂いのけ、かなり広いこけのしとねと取り換える。こけの上にエーテルをあげておくと、じきにはちはやって來た。エーテルの蒸気があんまりきついので、かれはちよつとわきに退いていたが、やがてそのこけの上に飛びおりて、障害物を通過してわが家にはいつて行った。

今度は昆虫を案内する力のある、特別な感覚の座といわれる触角の方面から試してみようと、「はなだかばち」を捕らえ、触角を根元から断ち切つて放してやった。虫は矢よりも早く飛んで逃げた。私のもどって來るかどうかはなはだあやぶみながら、たつぶり一時間ほど待っていた。はちはもどって來た。そして触角のあるはちと同じように、やす／＼と自分の住まいにはいつて行った。

かくて、外見を変えた敷地も、色彩も、においも、材料も、また傷口の痛みも、すべてはちを感わすことはできなかつた。私は、昆虫が何かわれ、く知られない能力を持つとしない限り、どうしてもこの問題を解くことができなくなつた。

その後、一つの実験の機会がうまく現われて、新しい見地からこの問題を再び取りあげることになつた。それは、「はなだかばち」の巣穴を、ひどく無理をせずにかりむき出しにすることだ。この目的のために、砂は少しずつ小刀の先でかき取られた。屋根がなくなつてみると、この地下住宅はまっすぐな、あるいは曲がつたみぞだ。長さは二デシメートルぐらい、戸口であつた点はあけはなしで、もう一つの端は行きどまりで終り、そこに幼虫は食物のまんなかに横たわつてゐる。

母虫は、もどつて来た時、どうふるまうであらうか。もちろん、母虫はその幼虫に食物を與えるためにやつて来るのである。けれども、この幼虫のところへ行くには、まず戸口を見つければならない。裸虫に戸口、それがこの問題においては別々に考察されなくてはならないと思われる二つの点だ。私は、それゆゑ、まず裸虫と食物とを取り去つた。すると廊道の底は空虚な場所になつた。これで用意はできた。

やがてはちがやつて来る。そして玄關しか残つていないこの戸口へ、まっすぐに行く。そこで、表面を掘つたり、掃いたり、砂を飛ばしたりして、頭で押せばらくにあいて通路を作つてくれる、あの動きやすい戸締まりを懸命にさがしている。が、動きやすい材料のかわりに、かれはまだ掘り返されてない堅い地盤に出くわす。この抵抗を感ずると、かれは地面を調べまわすだけにしておく。地面といつても、それはいつも出入口があるはずの場所のごく近くだけだ。「戸口はそこにあるのだ。よそにはない。」といふかれの確信は、それほど確かなものだ。私は、幾度かわらでそつとかれを他の点に押しやつた。虫は私のするまゝになつてゐる。けれどもかれは、すぐさまその門の敷地にもどつて来る。時々、半暗渠（半暗渠）となつた廊道は、いくらかかれの注意をひくらしい。二度か三度私は、かれがみぞを端から端まで通つて行くのを見た。かれは幼虫のへやの行きどまりに行きついて、そこを注意もせずひつかいてから、入口のあつた点に急いでもどり、そこでまた強情に探索を続ける。

それでは、幼虫がいたらどんなことが起るか。これが問題の第二の点だ。私は、実験のために、もう一つの新しい巣をさがした。

巣穴はさつきと同様、端から端までむき出しにされた。けれども今度は、幼虫や食物はそのまゝにしておいた。ところで、玄關でも廊道でも、幼虫とその食物の双翅類（双翅類）の山のある底のへやでも、すみからすみまで手に取るように見える、この明けはなしの住まいの前で、はちは例のごとく入口のあつた点に足をおろす。母虫が掘り、砂を掃くのはそこだ。母虫が幾寸かの半径内にある他の場所でも、ちよつと試した後、いつももどつて来るのはそこだ。苦しみもだえてゐる幼虫のことなど全然問題にしていない。それは、さしあたり彼女にとつて、地面の上に散らばつてゐる小石や土塊となんの異なるところもない。幼児のゆりかごに行くために死力をつくしてゐる母親にとつて、いま必要なのはたゞ單なる出入口だけだ。むすこは目の前で太陽に焼かれてゐるのに、母虫は今も存在してゐない通路をさがすことしか考へてゐない。このおろかな母性愛を前にして、私はたゞ驚くのほかはなかつた。

母虫は長い間迷つたあげく、結局、もとの廊道の残りであるみぞの中にはゐる。時々、廊道の底、現に幼虫の横たわつてゐるその地点にまで達する。母と子とは対面する。ながい苦しみもだえの後の

この対面に、なんらかの母の喜びのしるしがあるだろうか。母虫はその幼虫を見覚えていない。彼女は裸虫の上を歩く。よろしゅうなく踏みつける。へやの底を掘ってみようとして、むざんにけとばして後の方に踏みのける。押し出す、ひっくり返す、放逐する。こんなふうに手あらくされると、幼虫の方でも考えてくる。私は、それがまるで獲物の双翅類のあしでもかじるように、えんりょなく母虫の附節ふせつに食いつくのを見た。母親は羽音を立てながら、驚いて姿を隠してしまう。そして、再びその好みの場所、住まいの玄関にもどって、そこでいたずらな探索を続ける。

これが本能の諸行爲のつながりである。それはどんな重大な事情でも乱す力のない一つの順序をもつて、一つが他を呼び求める。入口がないということのために、第一の行爲が果たされない。それでは次の行爲も果たされないのだ。

本能と知力との間には、なんという深いみぞがあることであろう。母が知力に導かれる時、こわれた家の木くずの申を通して、まっすぐにむすこのところに行く。本能に導かれる時、それはもと戸口であったところにあくまでたゞすみつくしている。

(フアーブル原作―山田吉彦の訳による)

六潮目

ある秋晴れの日に、私は海岸にある山の上へのぼって行った。海は静かにひらけていた。岸に白くくだけている波も、こゝまでは音が聞えて来ないから、不思議に静かな感じを興える景色であった。

海の上に、一本のやゝ廣い線を引いたように、全く波のない、油を流したようなところがつゞいていた。その線はまっすぐにのびているのではないが、遠く沖の方へ走って、先はわからなくなっている。

ちょうどその時、十二、三歳の男の子がふたり私のいる山へのぼって来た。私はさっそく、かれらに、あの海の上の線はなんだか知っているかときいてみた。

「知らないよ。」

とかれらは答えたが、その中のひとりはずくに、

「あそこには魚がいるよ。」

とつけ加えて言った。

私はかれらがその名も知らず、そのできるわけも知らぬが、あそここの帯のようなすじのところには、「魚がいる。」と言ったのをたいへんおもしろいと思った。そうしてよく見ると、その線に沿って点と漁船の浮かんでいるのが見えた。海の水面に見える比較的幅の狭い、帯のようなこのすじが潮目である。そのすじは、あわや、ごみや、あるいは海藻かいそうなど、水に浮くいろ／＼のものが集まっていることもある。またさゞ波が立っているもの、あるいは全く油を流したように静まっているものなどがある。それが潮目と呼ばれているのは、潮の目、即ち二つの異なった潮の境目、筋目という意味を持っている。そのすじが、どんな理由や条件からできるものであろうか。

潮目の現象に、最初に気づいたのはだれであったらうか。それは、おそらく海に実際に出ていた人々であったらう。私が山の上で会った漁村の少年たちは、あそこには魚がいるということを知っ

ていた。かれらの祖先は代々この漁村に住んでいて、早くからそのことを知っていたに違いない。それがどうしてできるものか、どんな性質を持っているかは、かれらは探ろうとしなかった。しかし、海の上に見えるこの不思議なすじのところは魚がいることは、よく知っていたのである。

漁業にしたがっている人たちはばかりではない。航海者などもまた気がついたのである。こういうことは、実地に当たっている人の経験から生まれて来たことが多い。それがだん／＼学問的に、科学的に追求されて行った。そうして、ついにその正体がわかるようになったというのが、順序のように思われる。

それでは、学者たちは一体いつごろからこれに気づいていたであろうか。

大航海者キャプテンリックツは、その第三回航海の時に、船乗りたちが「海のものこくず」と言っている、この現象に気がついている。

また、有名な生物学者ダーウィンは、一八三一年、かれがちょうど二十二歳の時に、英國の軍艦ビートル号に乗りこんで世界一周に出た。翌三二年に南大西洋・南太平洋・インド洋の熱帯海で潮目の現象を見て、後に著わした「ビートル号航海記」の中にそのことを書いている。

かれらは、ある日チリの近海で赤粘土のどろ水の川のような色をした水の帯を通過した。そのチョコレート色のように濃い赤い水と、本来の海の青い水とが接している線は、はっきり分かれていた。

また、くじらのえさになる甲殻類の群集のためにできた、あざやかな赤色をした水の細長い帯を見たこともある。

またガラバゴス島の沖では、長さ数海里で幅数メートルの、暗黄色かどろ色をした三つのしま状をした水帯を見た。それは、くね／＼折れ曲がっていたが、まわりの青い水とはっきり区別されていた。

ダーウィンは、どうしてこのように生物の群集が帯状になっているのか、その帯の長さや狭さを定めるものは一体なんであるか、流れの作用と何か関係したものには違いないが、どうしてできるのかわからない。全く不思議であるという意味のことを書いている。

英國の大科学者で、アルプスの登山家としても有名なチンダルも、また、その「アルジェリア旅行記」の中に、潮目のことにふれている。それは、ジブラルタル海峡附近で、水の色が生／＼した緑と、深い青色のさわだつて違った海流の境を横切ったことがある。その時、船のへさきに立てば青い澄んだ水をくむことができ、ともでは濁った緑の水をくむことができたというのである。

大洋の風と海流との図を、はじめて作り上げたアメリカのモーリーは、一八五八年にその著わした本の中に、海上の不思議な現象として、潮目のことを書いている。

このように、クック・ダーウィン・チンダル・モーリーなどのすぐれた科学者たちは、早くからこの現象に気づいていたのである。

日本ではどうかであるか。明治二十五年、水産予察調査報告というものに、茨城縣の沖に、春、著しい潮目が見えるということが書いてある。これが私の目にふれた一番古いものであった。

また、北原多作先生は、捕鯨船の船長や漁船の船長にいろ／＼たずねたり、その他の方法で、金華山の沖に潮目があつて、そこには、ま／＼こうじらがよく集まる。また、かつおもその辺に群れているということを確かめられた。そこで、「二つの海流が合う所、即ち潮境は、魚の集まるよい漁場になっている。」「潮目は漁場の目じるしになる。」という説をたてられた。これこそ北原先生の発見された

法則であつて、水産学上誇るべきものと思われる。

(宇田道隆の文による)

七日記から

月 日

きょう、國語の時間に、大木君が「星の傳説と花ことば」という作文を読んだ。星にはさまざまの傳説がまつわつていて、それを思いながら、星座をながめるのは楽しいと書いてあつた。それから、あの星が、なぜ、さそりに見えるのか、白鳥に見えるのか、琴に見えるのか、よくわからないとも書いてあつた。しかし、そのような形をしていると思つて見れば、そう見えないこともない。このことから、いつか先生からきいた比喩のことが思いだされ、それに続いて花ことばが、ふと心に浮かんで來たと書いてあつた。天上には、星座の傳説、地上には、花ことば、何かしらおもしろいものがあるように感じたと思つてあつた。

読み終つてから、組のものが、これについて思ひ／＼の感想を述べあつたが、これもおもしろかつた。

月 日

大木君の作文が、一つの種子となつて、組のものの討論が、いろ／＼なことに発展している。きょうも、「天体の神祕」について、話が限りなく出た。天体のことを考えだすと、自分という考え

がどこかへ行つてしまふ。氣持が廣くなり、自分が、空いっばいに拡がって行くような氣さをする。

月 日

学校の手入れをした。雑草をむしっていると、ばつたがとんで來た。ちやうもとんで來た。ありも通つて行つた。人間よりもまだ／＼小さな生きものがある。たとえ小さくても、どれもこれもみな完全な生きものだ。どれ一つとして未完成のものはない。バクテリアなどを思うと、さらに小さな世界に心が引かれる。いくら小さくても、命があるのだからおもしろい。國民学校でならつた國語「五」の「朝顔の花」を思いだした。

月 日

夜になつておじさんが久しぶりにいらつちやつた。おじさんの乗つて來た汽車の前の列車が事故を起したのでそうだ。もし、おじさんの汽車であつたら、今ごろこうして会えないかもしれない。「運命というものは、いつどうなるかはわかり知れないものだ。」とおつちやつた。

「全く人間は、あすのこととはつきりはわからない。この不安の中で、安らかな氣持で暮らして行くには、どうしたらいいかな。」

と、おじさんにきかれて、私はいろ／＼考えてみた。

月 日

おじさんのことばが私の頭を占領している。「平安な暮らしは、いかげんな考え方ではできないということ、自分の力などは実に頼みがないものであることをはつきり知ること、このはかない自分を安心させるに足る確かなものにすがりつくということ——」こゝまで考えた。けれども、その

確かなものとは、一体何なのだろう。

月 日

父と川へつりに行った。流れについて糸を垂れていると、自分のからだは川上の方にすべっていくように感じた。

父か、大きなうぐいをつりあげて、大喜びだった。

月 日

私が、新しい討論の主題として、「確かなもの」を提唱した。先生も、これがよかろうと言われたので、それにきまった。「確かなものは、いつまでも変わらないものだ。」とか、「いや、変わるということとこのことだ。」とか、「目に見えているものや、形になっているものは、確かなものではない。」とか、いろ／＼話かはずんだ。

私は「永遠なるもの」ということが新しく氣にかゝりだした。

八 初夏の奈良

奈良はいつ来てもよいが、ことに新緑のころがよい。さくらのころに来た時には、まだ黄色に枯れたまゝであつたしはは、生き／＼と青くなつて、しかがその上に寝ころんだり、また、その青い芽をたべたりしていた。

猿沢の池のやなぎは、もえぎ色をしたその若々しい美しさが、やゝ老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ水に映っていた。春によく来る團体の客のざわめきも今はなくて、池のふちにあるベンチには、木陰を求めて子供を遊ばせている女がいるばかりだった。

荒池のほとりは、なお静かだった。奈良ホテルに沿って、葉ざくらのほの暗いほどの小道を歩くのもよかつた。池には遠くの興福寺の塔の影が映っていた。その水に石を投げて水の輪が拡がって、それが消えて行くのを待っては、他の子供が石を投げるのであつた。

うめの木が林をなしている所では、園丁がその枝をおろしていた。しばの上に落ちた青葉には、しかが寄つて来て香をかいでいた。

嫩草山・高田山が、それ／＼にこんもりとして輝いていた。高畑のからりとしたしばふの上には、大きな花が咲いたように美しいこうもりがさが動いていた。あせびの花はたいすがれていたが、その花の多い谷のようになった道には、美しい影ができて、こまかくもれてひそんでいる光のたわむれもおもしろかつた。

春日の社に近いすぎの木立は、夏らしく黒み渡つてその葉の先から、愛らしい浅緑のつめのような若葉が出ていた。お参りの人の多く通る道には、しかがたくさん待ちうけていた。私は手に持っているだけのせんべいをみな與えてしまったが、かれらはまる／＼としたかわい目私に向けて、いつまでもせびるようについて来た。一匹のしかは私の前で首をあげたりさげたりした。それはおじぎなのだった。私はおとなしく私の前に脚を折っているしかの背を、いぬにでもするようになでやめた。文字通り鹿子まだらのはだはつや／＼していた。五月は毛なみの光沢の一番美しい時だということである。抜けかわつてまだまもない角は、やつとY字形になつたばかりで赤みを帯びて、柔らかなそ

うだった。手に握ってみると、その赤い色の血のぬくみが感じられた。

南大門の通りには、つばめがたくさん飛んでいた。そこらにたゞずんでいるしかの細く高い脚の間を、すり抜けるかと思うように飛んだり、角細工などのみやげ物を並べている店の軒に、ついと飛び入ったりしていた。

大佛殿を左へ、まつ林の間を行く道の感じもよかった。草が長く伸びるまゝになっている向こうに、実に古い堂が見える。それは戒壇院らしかった。顧みると、大佛殿の屋上の鴟尾しびが、金色さんらんとしてまつの間が高くそびえて、まつのごずえにはせみがじい／＼と鳴きはじめていた。轉害門てんがいもんは奈良に残っている建築のうちで、最も古いもの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだと思った。私はその門をはいって大佛殿の裏を歩いた。竹がわっさり道に垂れていた。かきの若葉が日を照りかえていたりした。古い寺院の土べいつちべいが崩れたことよって、かえって絵画的に見えるような、さびしいひっそりとした道だった。築地のすそにはきんぼうきんぼうげが咲き、白い小さなちょうが休んでいた。

嫩草山と春日山との間にある谷の道は、若葉の緑が顔にうつるような、ほがらかな感じの所だった。つま先あがりつまさきあがりに、苦しくないほどの登りになって、山の奥に踏みこんで行く。ほらあなのかえでといふ名のついでに、かえでがトンネルようになってあり、高い木には、ふじがあちらにもこちらにも咲き垂れていた。奈良はふじの花の多い所だが、公園の茶屋のそれなどは、お、かたすがれかたすがれてしまっているのに、こゝだけは、まだふさ／＼とした紫を垂れて美しかった。奈良の若葉はいいなと、私はいまさらのように思った。

私は緑の深い中を縫いながら、あてもなく歩いた。

(萩原井泉水の文による)

九 りすを育てる

山の草刈り人が、見つけておいたりすの子が、巢ごと私のもとへ届けられたのは、七月の初旬であった。すぎの皮とはいうものの、こまかにほぐしたものを、あむようにしてまるめてあるので、手ざわりも色合いも、むしろ、しゅろの毛で造ったといいたいようなその巢の中には、三匹の子りすがいた。生後一箇月と推定されるこの子りすたちは、まだ歯が目だたず、からだに比較して頭が大きかった。尾はまだ細かったが、それでも、むじゃきむじゃきそのもののようなおしりの上に、いかにも大人らしくその細い尾をびんと立てていた。

しかし、なんとというかわいらしい目つきや、足つきであろう。うすい茶かっ色にくまどられたまぶたに守られる目は、まるで黒曜石のように輝いて、あらゆる哺乳動物の乳児に特有な、涼しい張りを見せているし、鎖骨さかほねのある前脚は、おの／＼の指が離れていて、まるでかえでのようにあどけない。毛の生えている小さな耳、柔らかなスロープをつくる前額、いちちょうの実の両端のような形に切れあがった目じり——今のうちは、まだすばしい動作を示さず、胃のふさを満ちていけば、三匹がころころとかたまりあって、眠りほうけているのである。

しかし、りすを乳児から育てた経験の乏しかった私たち家族の間では、どうして育てるかが最初の問

題であった。哺乳動物だから、乳を飲ませればよいことはわかっている。が、どうして飲ませたらいいのか。私たちはあれこれと考えたすえ、試みに脱脂綿に牛乳をふくませた。

そうして、一匹一匹りすを巢からつまみ出して、その鼻先へ、一方の手の指先でその牛乳をふくませた綿をあてがってみた。乳児たちは、前脚でその綿をひしとか、えこみ、長い後脚を手首にからんで、うつ向けた私の手のひらへ、おお向けにぶらさがった。そうして、母の乳房をしぼるように、かわいい前脚の指先で、綿をおしては乳をしぼりながら、うまそうにちゅちゅと吸うではないか。そこで、子りすたちがせつせつと綿をおす時には、かれらを失望させないように、私は、三本の指先で強く綿をおして、とくくと牛乳を口に流しこんでやる。それで、母の乳房からおいしい乳をしぼったつもりで満足しているのだ。だが、そうなると、脱脂綿の方も、乳房の形に突起のあった方がいいので、三匹が一度に飲むことができるように、三つ以上の突起をこしらえてやる。その方がくわえるのにも便利だし、綿の中へ鼻をおし入れて窒息したり、乳を鼻から吸いあげたりすることも少ないわけである。

たゞこれだけのことだが、はじめのうちは不器用で、指先から手首へ傳わってぼた／＼落ちる乳のしずくで、子りすの腹をぬらしたり、綿を強くしぼり過ぎたために、子りすをむせさせたりする。が、なれるにしたがって、今まで親指と、人さし指と、中指だけでつまんでいた綿を、やがては、五本の指でつかむようになり、その五本をうまくあしらって、三つの乳房、即ち綿の突起から同時に乳をしぼりながら、三匹の子りすに、一度に飲ませることもできるようになった。それから、牛乳には砂糖も入れて、味の調節もしてやる。もちろん、七月の上旬・中旬といえは、牛乳の腐敗も早いから、牛乳屋に頼んで、毎日早朝と、午後とに、五勺ずつ配達してもらおう。そうして、腹いっぱい飲ませて巢へもどせば、子りすたちは、柔軟自在なからだを、もんどりでも打つようになる／＼まわしたり、おお向けにしたりしながら、文字通りまるまりあって眠ってしまう。が、みなさんは想像することができるだろうか——三匹の小さなりすが、一度に私の手にぶらさがって、ちゅちゅと小さな音を立てながら、砂糖入り牛乳をむさぼり飲むかわいらしさを。また、一息つくごとに、その無心な黒目が私の顔か、てのひらか、それともどこかという意味もないような一点を、珍しそうに、まじめに見つめるのを。私が乳を與えている間、家族はほとんどつきさりで子りすを見ている。そうして「まあ、かわいい。」と感にたえぬように言ったりしているが、そのうちにがまんができなくなって、ついと私の手から子りすを奪い取る。

「よせよ。乳を飲んでいるさいちゅうに。」と、私がしかるのをしりめにかけて、今度はほかの者が一生けんめいに乳を與える。

「ねえ、たゞ、りす、りすじゃつまらないでしょう。」と言う。

「つまらないとは。」

「だって三匹もいるのですもの。めい／＼に名まえがなけりゃ……。」

「そうだな、なんかいい名まえはないかな。」

「たまじゃどう。たまに、ころに……。」

「いやだね。そんなねこみたいな名は。」

「じゃ、りちこはどう。ふだんみんな『りち公、りち公。』と呼んでいるじゃないの。りち公より

はりちの方がかわいいでしょう。」

「うむ。それでもいい。そうしよう。」

「それから、あとの二匹は。」

「めんどうだから、みんなりちでいい。」

みなさんは、たわいもない家庭風景などを聞かされているようで、少々迷惑だろう。が、およそ子りすたちに関するかぎり、ほとんどのいっさいがたわいないことだ。たわいのある、能率のあがる研究などをしていたのでは、子りすたちは、人間となんらの交渉も持ちはしまい。研究研究とあまり肩を張らずに、たわいなくかまっているうちにも、おのずから習性の観察などはできて行くのだ。ともかくも、この三匹は、共通のりちこという名で、私たち家族に育てられて行く。体長約十センチ、尾長約九センチ、暗黄かつ色の尾は、子供たちが俗に「ねこじゃらし」といっている禾本科植物の穂を、そのまゝ長くしたような線状を呈していて、毛の先端は白い色にぼかされている。

さて、こうして牛乳で育てられて行くうちにも、早いもので、同じ七月の二十日ごろには、だんだんに歯も目だつて来るし、りす特有のちようやくもできるようになる。そうして、尾をびんとかめしく立て、長い後脚で床の敷物をけりながら、びよこんとうさぎのように、しかしあざやかなすばやさで、へやをかけまわり、あるいは、三匹が、互に尾を追っかけあって、じゃれまわったりしている。

ちょっとこいで、歯のことを言わせてもらうが、一体りすの門歯は、くるみのような堅い実や、樹皮などをたべする必要から、上下両あごの各一對とも、すこぶる鋭く曲がっており、そうして、その門歯に、のみのような強い働きをさせるために、それがあご骨にはまる部分は、露出部よりも長くなっている。

また、前面ののみにほうろう質があるので、物をかじるにつれて他の部分はすりへり、したがって、ほうろう質をかぶつたのみは、ますます鋭さを加えて行くが、しかも、これは、内側から絶えず、新しく生ずるために、のみはいつでも鋼鉄のようだ。

それから、りすには犬歯というものがなく、前面の門歯から間をへだてて、一足飛びに、食物をこなす臼歯は臼歯になっている。いうまでもなく、これもまた、門歯が球果をうがつ時に、他の歯がこれに接してはじゃまだからで、要するに、いっさいが物をかむのに都合がいいようにできているのだ。こういう特徴はすべて、私のもとへ送られてから、二週間めに顯著になって来た。

歯とともに著しく発達して行くのは、樹上生活に便利な諸点だ。屈伸自在なからだ、ちようやくに適する強くて長い後脚、樹枝を握るのに都合がよいようにわかれた指、樹幹をよじのぼるのに必要な鋭いつめ——りすはこれらの構造のおかげで、いたちや、きつねなどに追われても、樹幹をらせん状にのぼって、害敵をめんくらす。また、たか類や、ふくろうに追われた時は、尾を頭の上までくるとなびかせて、そのへんべいな屋根の下にからだをかくす。もっとも今のところでは、尾のそうした特徴はまだ現われず、あい変わらずねこじゃらしというか、あるいは、とっくりをそうじするはけとでもいうかのような形でしかない。ちようやくの方も、まだ五、六十センチだ。そうして、ビィッと鳴き声をあげながら、大きな頭を振り立てて、びよこんびよこんと歩いているが、この大きな頭も、後に胴の部分がそれに應ずる程度に発達することを示しているものだ。が、なんとこの品のよい

色合いであろう。さびた赤色を帯びた四本の脚、豊かなくり色の体側、それが腹部へ移るにしたがって次第に薄くなり、腹部で純白になる階調。背面のしぶい灰かっ色。そうじて純日本的な、はででないうちにりんとした氣品を漂わす色彩は、はなやかな万華鏡にそろ／＼飽きの來た私を十分魅するにたる。

さて、このくらいに育つて來ると、私たちは、いち／＼綿に乳をふくませるめんどうをしなくても、なんとか簡単に乳を飲ませる方法があるまいかと考えるようになる。また、ねこを飼っている私の家では、監督なしにへやに放しておくわけにも行かないので、私たちがいそがしくてかまっていられない時でも、りすどうしが勝手に遊びたわむれていられるような、ゆったりしたかごを、あてがおうという考えにもなる。ちょうどさいわい、じゃかごの不用なのが一つある。

これは、約六十センチ立方の金あみで、底は亜鉛板だから、このかごなら、りすの鋭い歯にかみこわされることはない。そうして、中には、まだうい／＼しい葉のついたくぬぎのこずえを立て、底にはわらを敷きつめてやる。もつとも、夜の寢床だけは、ふるさとのりすの巢をそのままにして、わらの中へ埋めておく。りすのかごによく車を入れてやる人があるが、もし車がなければ、どうい運動をするかと思つて、わざと車を入れずにおく。ところがいいあんばいに、かれらは、キニキニ、クツクツという甘たれた声をあげ、廣い室内よりは、かえつておにごっこに都合のいいこの金あみの中で、縦横に枝や、あみの目を傳いながら追っかけてこをするのだ。一匹が、他の者の尾にとびつく。と、相手は、わらの上でくるりと一つあざやかなもんどりをうつて、逃げながら枝に移る。追う方も急いで枝に行く。と、今度は、相手は、後脚で枝からたたりとつりさがつて、そのまますとんとわら

の上へ落ちる。かと思つと、樹皮をかじり、葉をたべ、四角な金あみを、一直線に下から上へ、天井から下へとひとめぐりする。このひとめぐりがなか／＼おもしろいと思つたらしく、偶然に覺えたこの運動を、まず、体格の一番いいのがなんべんでもくり返し、ついには、ひんばんにこれを續けて、車のかわりにしている。

乳を飲ませる道具の方も、綿からスポイトにかわつた。乳を吸いこませたスポイトの口を、金あみの目にあてがう。すると、りすたちは、急いでそこへ集まつて來て、スポイトの口から牛乳をすゝる。どうせわれがちなのだから、一番発育のいいのが、いつでも先に腹いっぱい飲むことになる。人間の場合は、分別のある行動の方が美しくみえるが、獸、それも幼い獸は、かえつてこの方がかわいらしくみえる。それにしても、交互に落ち着いて飲めるようにしたいと心配したが、そこはよくしたもので、二番めに大きいのが、おもしろいぼうぎよ法を発見した。それは、じょうぶな門歯をしっかりと金あみの目にからむことだ。こうしていれば、せつかく飲んでいるさいちゆうに、一番強いのに頭で思いきりこずかれても、自分の口は元の位置を離れずにすむ。そうして、からだじゅうの力を門歯に集めて、ぐん／＼と乳をむさぼり飲む。やがて一番小さいのも、この方法を習得してがんばり出した。が、これでもまだ、お互にらく／＼と牛乳の分けまえにはありつけないだろう。その上、こんな競争をしたのでは、スポイトの先をかみくだいて、ガラスをたべる危険も十分にある。そこで、やはり順々にてのひらへさせて、乳を飲ませる方がいいということになつたが、うっかりすると、見分けそこなつて、同じ子りすに二度続けて飲ませないともかぎらないので、うちの者の発案で、とりどりに色の違う人絹の首輪をしてやることになつた。一番大きいのと、次のとは、大ききの區別がよくつ

くので同じ色の赤い首輪、三番めのが黄色い首輪だ。これはなか／＼うまい思いつきで、順々に養ってやることができる上に、首輪をしている姿が、小さな動物をいつそうかわいらしくする。

七月が八月となった。むし暑い日が続くので、清涼な山地に住むはずのかれらにとって、人間の家の生活が適應したものでないことが、憂慮されて来る。からだが一番大きくて強いのは、元氣にあみの中で曲藝のようなことをしたり、わざと日の当たるところで、長々と四つんばいに寝ころんで日光浴をしたりしているが、あとの二匹は、目だつて食欲が減退し、動作がふかっぱつになつて来る。山の人のうわさによると、私のりすたちとほとんど同時に、山で見つけて他の家へ送つた子りすたちは、炎暑のためかどうかは不明だが、ともかく、全滅したという。そんなことを聞くにつけても、不注意にはしておけない。そこで私たちは、晝は、庭の木陰にかごを置き、夜は、一番涼しいへやや、また時には、ねこの夜間の通路にと穴をあけておいた、湯殿のドアのそばの風通しのいい場所にかごを移す。が、いろ／＼の注意もむなしく、八月八日のむし暑い夜、一番ちびが、すっかり参つてしまひ、夜明け方になつて、介抱のかいもなく、私のてのひらの上で、もろくも死んでしまつた時には、少し感傷的かもしれないが、私たち家族の悲しみは少なくなかつた。

人は、ばか／＼しいと笑うだろう。が、私たち家族には、「死んだよ。」ですましていられない氣持があつた。かりに、私のてのひらの上で横たわつてゐるかれんな獣が、からだは、えびのように曲がつて硬くなつていても、目だけは、命のあつた日と同じく、涼しく張られているかっこうを、思つてみたまえ。たとい、たわひないことがらばかりであろうと、ともあれ、愛情と名のつく感情を傾けて暮らした私とすれば、これが、もう生命を土にかえしたむくろ、魂の飛び去つた一かけらの物質だと

は、思いたくない。そこで私たちは、まず、この子りすの首輪を、他の同腹の兄弟たちと同じ赤い人絹に取りかえてやつた。そうして、庭のすみに穴を掘つてわらを敷き、死がいをその上に横たえてから、いつも好物だつた日本くるみを、生きていた時の思い出に、むくろのそばに添えてやつた。それから、土をかぶせてしまうと、「りち公の墓 わら床にくるみを添えて 昭和八年八月九日」と書いた棒／＼を、土まんじゅうの上に立てた。あとから考へるとおかしいが、数株のききょうが開花している涼しいはぎの下陰を墓地としたのも、せめて、死がいが早く腐敗しないようにとの心やりからであつた。そうして、私は今でも思うのである。「あのりすの死がいを、ねこのごちそうなどにしななくてよかつた。」と。

さいわいに、ぎせいはこれだけですんだ。ところが、このちびの死とともに、もう一匹のちびの方がめつきりじょうぶになり、翌日からはにわか食欲も盛んになつた。そうして、まだ乳離れこそしないが、とうもろこしや、日本くるみのほかに、にんじんや、いもや、なんきん豆や、木の葉などもたべるようになった。

やがて、季節がめぐつて九月の中旬以後になれば、わざ／＼割つてやらなくても、自分で固いくるみに穴をあけるようになるだろう。ついで、何よりも好物なくりの季節になるし、かきもまた、なかの好物に違いあるまい。

子りすたちは、一日一日と私たちに近れ親しんで行く。そうして、ちよつと腹でもなでてやると、子ねこかいぬころのように、くるりとあお向けになつてみせ、てのひらにのせてからだをかいてやれば、こ／＼ちよげにうすぐまる。また、かごのそばを通れば、あみ目をわたり歩きながら、人の行く方

角へまわって行くし、ふところに入れば、着物のえりをかんだり、えりにはさんであるつまようじをかじったりして、余念もなく遊ぶ。たとい、人の指先をかむことがあっても、もちろん、ふざけているのだから強くはかまない。あたかもいぬが飼い主の手をくわえて、たわむれるようなものである。人間がかまってやらないと、兄弟どうしで上になり下になりして、すもうをとっている。それにもあきれば、後脚のつめで枝からさかさにつりさがって、機械体操のように前後に大振りをやっている。いよ／＼これで子りすたちも、家族の一員らしくなって来たわけである。

九月中旬にはいると、果たしてかれらは、日本くるみを自分で割るようになった。恐るべき歯のみではないか。くるみは、人間ならば火であぶって合わせ目からほうちょうを入れ、針のようなもので掘り出したりしてたべるのであるが、りすは、つぎ目のない胴っ腹に穴をうがって、食い破って行くのだ。よく知っているもので、こうすれば、人間がナイフで掘り出すようなところでも、いきなり歯が当たって行って、かすをあまさず、果実を全部たべることができるのである。こんな歯だから、へやで遊んでいるところへ、ねこがはいって行ったのを気づかたりして、あわててつかまえてやるうとでもした時、人間のあわたゞしさにびっくりして、たま／＼人間にかみつく痛さといったらない。皮膚などはひとかみで破って、鋭い歯先で肉深く刺す。いろ／＼のごちそうのうちでも、特にくりはおいしいごちそうだ。この時分は、もう山から持ち越しの巢は、ぼろ／＼にちぎれてしまい、かれらはわら床の下側に、別に自分らで、こまかくわらをちぎって寢室を作っていたが、この中で、たといあお向けにひっくり返って眠つていようと、くりさえつき出せば、さっそうとして飛び出して来る。そうして、長い尾と後脚とを三脚のような支柱にしなから、体重を尾にゆだねてすわり、一對の

前脚でくりを抱きながら、せつせと口で皮をむきはじめる。そのじょうずなこと、かれらは、手のような働きをする前脚の先で、絶えずくりをひっくり返しながら、順次に皮をむしり取ってはあたりに飛ばし、ついで、歯で濫皮を巧みにむいて、さながら、人間がナイフでむいたようにしてからたべらる。

「栗鼠」とはうまい字をあてたものだ、つく／＼思う。それにしても、親からもだれからも教わったことのないこういう技術のよって来たところは、やはり、本能の祕密に帰すべきであらう。それに、すわった姿勢のかわいらしさが、また格別である。

ところが、九月下旬のある朝、大きな方の子りすが、はからずも、戸外に遊びに行ったきりになつてしまった。はじめは、後庭の雑木林のえごの木のかずえ、次にはくりの木のかずえ、三度めには道を横ぎって、向こう隣のすゞかけのかずえへと遊び歩いているのを、次々と追いかけたが、なにしろ、すばやさぎてつかまえることができず、大好物のくりさえ見せれば、かずえからのひらへとおりに来ながら、ついと、すりぬけて地面に飛びおりました。そうして、木の下やかきねをくぐって、また／＼くまに姿をかくす。私たちは、家じゅう総出で、まる一日追いまわしたにもかゝらず、とうとうその日はそれなりだった。ところが、その次の日には、附近の住宅地を遊び歩いていたという報告を聞いた。お宅のりすらしいのが、私のうちの庭の木にいましたというような報告が、近隣から来る。「首筋が赤いのは、風変わりなりすですね。」とも言ふ。例の赤い人絹の首輪がはげて、首筋を染めていたのだ。五日めにはうまいぐあいに、庭内のじゃり道傳いに、玄閑の前まで帰って来たが、女中が「あ、りち公が帰って来ました。」と叫びながら、うれしまぎれに玄閑のドアから飛び出したいきおに、かれは大いにめんくらって、また／＼住宅地の方か、林の方かへはねて行ってしまった。なに

しろ、そこら一面にくりの実はみのついているし、ちょっと遠出をすれば、畑にははくさいもある。林じゅうの秋のきのこ、ふんだんな樹皮や樹葉、というように、食料の豊かな、まるで食堂そのもののような場所なのだから、容易に帰って来ようとも思えない。こんなことで、九月の下旬には、三匹の子が、たった一匹になってしまったが、そのかわり、最後の一匹と思つてよけたいせつにするせいか、加速度にいよ／＼私たちになれ、三四分ぐらいちやめもしたり、慕ったりするようになった。

九月下旬から十月初旬へかけて、私は、十日間ばかりの信州の山旅をしたが、その旅行中、乗鞍岳のりくらだけでも、美うつくしが原方面せまでも、八ヶ岳の行者小屋附近でも、よくリすを見かけた。

附近の炭焼小屋の男の話では、地上六メートル以上のこずえなどで、木の実を摘んで落してから、自分の方が一足先に地上へ跳びおりて、自分よりあとから落下して来るその実を受け取るという。

「あの枝から、向こうの木のある枝まで、一跳びに跳びまさあ。」

という、距離を見ると、六メートルの間隔である。いまさらに驚くべきちやうやく力である。

旅から帰ってみると、子リすだと思つていたりちこは、意外にも、すっかり大人らしくなつていて、旅行前には、ねこじゃらしのようだった尾が、見るもあざやかなへんべいに変わつていて、まるでここのようだ。幅五センチ、長さば体長の二十センチよりもやゝ短くて十七センチ、十日見ぬまにがらりと様子が変わつてゐるが、この尾を波状に背と頭の上へ波打たせていると、からだは、全くその下に隠されてしまふ。前にもちよつと言つた通り、これなら、山野に出て、たかや、はやぶさや、ふくろうにおそわれた時のカムフラージの屋根になるであらう。また、つめたいトタンの上などに眠らなければならぬ時は、尾をしとねにして、その上に、からだをまるめてゐる。また、空中ちやうやくの時は、バランスをとつて墜落を軽くする道具にもなる。尾の用途は、よく観察してみるとなかなか多い。

が、大人らしくなつても、そのかわいらしさには、なんの変わりもない。つかんで眠らせようとする時、りちこは、二つ合わせてうつろにしたてのひらの中でも、くるりとひとまわりでんぐり返しをやる。そうして、頭をおろして眠ろうとするが、その回転のさいちゆうに、あお向けのまま、後脚で首をかいたりする。また、ひざの上でくりを興えると、前脚でくりをくる／＼まわしたり、皮をあたりにほうり出したりするしぐさは、あい変わらずだが、おかしいことには、後脚と尾とですわつてゐるつもりの姿勢がくずれて、やがて完全にあぐらをかいたようなかっこうになる。それらの身ぶりは、何一つとしてかわいらしくないものはない。へやに出してやれば、いすの脚でも、植木のはちでも、はち植木の植物の葉でも、敷物でも、やたらめっぽうにかんで歩き、ふところの中でくりをやれば、懐中をくりの皮の山にしたあげく、腹がふくれれば、その皮の上で、半日も眠りこけてゐる。そのまゝ、友人の家へ遊びに行こうが、散歩をしようが、おかまいなしだ。また、時には懐中であお向けにのけぞつて眠つてゐるおなかを、指先で突いても知らん顔をしてゐるので、ひよつとすると、窒息でもさせたのではないかと心配して、はげしくゆすぶってみると、うっとりとして、ねむそうな目をあけたりする。ねこの場合でも、ひざの上などであお向けに眠るのは、人間をすっかり信頼して安心してゐる証拠だそうだが、りすでも、また同じことだ。動物からこんなに信頼されたら、どんな人にしてもうれしいだろう。

わら床で眠つてゐるかっこうも、かわいいものだ。あお向け、横寝、伸びた寝ざま、まるくなつた

寝姿、耳をたゝんで首だけわらにつつこんだ様子、うつろにしたわらの中から、りっぱな尾だけを出している様子……。そのリすをかまいたくなくて、わらの上から頭をたたくと、クッククック、グルグル、グイイ、グルルグルというような声を、たたくたびに出す。うれしい時にも、怒った時にも、こういう声だが、なんのことはない、指でおすと鳴り出すゴム人形のようなものである。眠っているところをたしかれる時は、いうまでもなく、「なんだ、せっかく眠っているのに、よせよ、うるさいな。」というこゝとなのだ。

後庭の林の、なら・くぬぎ・くり・ぬるで・はぜなどの葉が、すっかり色づいた昨今では、私は、いつもストープのあるへやへリすのかごを置いているが、後脚ですわりこんで腹の上へ前脚を行儀よく置き、きよとんとした顔つきをして、あたりをながめまわしている。たぬきの腹つゞみのようなかっこうや、歩いているさいちゅうに、ふと片方の前脚を上へ高くさしあげて、からだをひねりながら、同じ側の後脚で小刻みに腹をかいているかっこうなどは、人間の大人にも子供にも見せたいユーモラスなものだ。また、窓のカーテンは、自分だけで遊ぶ時の一番楽しい遊び場だが、すばやくレールの金具までかけ登ったり、敷物の上におお向けになって、カーテンの房にじゃれたりする。こういう時、もしカーテンの近くにテーブルがあつて、その上によしごいが遊んでいたり、また、あたりにお、このはずくのかごでもあれば、よしごいは長い首をのびして、不安そうに、けんそうに、下からゆれて来るカーテンをながめ、一方、お、このはずくは、おれの食料のくせに、平気で眼前を上下したりしているのはよろしくないぞ、というような顔つきをしている。まだ生まれてからこわいものがない無心なりちこは、たとい、ねこが近づこうと、まるでむとんじゃくで、ひとり悦に入っているのだ。あるいは、さつきも言ったように、私のふところに飛びこんで来ると、ひとまわりでんぐり返しを打ってから、上向きの姿勢でうとくと眠る。ふところは、ほんとうにぐあいのよいところらしい。だから、かごの中へちよつとてのひらを出すと、そこから腕へ、腕からふところへとまっしぐらにかけこんで来るのが、一つの習慣にさえなっているのである。

人は、よく私のことを、人間よりも動物をよけいに愛する男だと言う。子供が空腹でもさまで騒がないが、鳥獣が空腹だったり、寒さにあつたりすると、大騒ぎをすつと言う。しかし、考えてみたまえ。人間の子供は、ある程度までは、自分で自分を処理し得る環境に置かれている。が、山野にいる場合と違って、飼われている鳥獣は、人間に頼らぬかぎり、どう自分を処理しようもない。空腹でも、ぐあいが悪くても、訴えるすべさえ知らず、たゞ黙って苦痛を忍んでいなければならぬ。みなさんは、病気の小鳥が、たゞふくらんでじっとしている姿や、寄生虫に心臓を犯されたシェパードが、なんとなくいつもの元氣もなく、ゆううつに、鈍重にしている様子などを、よく知つておられるであろうが、黙つて忍んでいるものには、それに比例して、それだけ多くの注意を加え、その微細な動作や、ほとんどとらえがたい表情にまでも精通して、それへの要求に、適度に應じてやる必要があるのではないであらうか。

私の信ずるところでは、動物の生態研究が、われ／＼の知識を豊富にするのと同じ程度に、動物を愛することは、つまり、われ／＼が、秩序と道理を学んでいることにほかならないのだ。

(中西悟堂の文による)

十末ひろがり

狂言

大名「罷り出でたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。
冠者「御前に。

大名「念なう早かつた。なんぢをよび出だすは別なることでない。明日は、いづれもを申し入れうと思ふが、何とあらうぞ。

冠者「まことに内々は御意なうても申しあげうと存ずるところに、一段でござりませう。

大名「よからうな。

冠者「はつ。

大名「さうあれば、引出物には何をか出さうな。

冠者「されば、何がようござりませうぞ。

大名「やい、思ひつけた。下からは、上かはからはれぬものぢや。某は末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。

冠者「ようござりませう。

大名「なんぢは大儀ながら、上方へ上り、急いで求めて参れ。

冠者「かしまつてござる。

大名「急げ。

冠者「はつ。さてもさても、某が頼うだる者は、立て板に水を流すやうに、ものをいひつけられまする。まづ急いで参らう。

とかう申すうちに、都さうにござりまする。やれさて、失念の致した。末廣屋を存せぬが、なんと致さうぞ。えい、ほしいものは呼ばはるていに見えてござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう、末廣買はう。

すり「罷り出でたるは、浴中にすまひする心も直にない者でござる。何者やら、どんどんと申すほどに、さわたつて見ませうぞ。なう、そなたは何をわつばとおしやるぞ。

冠者「そのこととござる。田舎者でござれば、末廣屋を存せぬによつて、かやうに申すこととござる。すり「なう、そなたは末廣といふものをお見知りやつたか。

冠者「なう、都人とも見えぬ。知つたればこれを買はうと言ふ。

すり「なう、誤りました。某は末廣屋のていしゆでをりやるによつて、ねんごろに問うてをりやる。

冠者「はて、仕合はせなことでござる。して、末廣のでき合ひはござるか。

すり「なか、ござる。

冠者「急いで見せさつしやれ。

すり「心得てござる。それに待たつしやれ。

冠者「は。

すり「やれさて、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。

思ひつけてござる。これにかさがござるほどに、これを持って賣りませう。
なうく、田舎人、それにござるか。これく。

冠者「や、は、これが末廣でござるか。」

ナリ「なかく。」

冠者「どれ、見せさつしやれ。」

ナリ「これ、ごろんじやれ。」

冠者「は、まことに拡げさつしやれたれば、はて、いかい末廣でござる。さりながら、頼うだ人が
注文のおこされてござるほどに、これに合うたらば買ひませう。」

ナリ「さらば読まつしやれい。」

冠者「先づ『地紙よく』としてござる。」

ナリ「これく『地紙よく』とはこの紙のことでをりやる。しはすぎつねのごとく、こんくと言ふ
ほど張つてござる。」

冠者「『骨みがき』とござる。」

ナリ「これく、『骨みがき』とはこの骨のこと、信濃しなのとくさをかけてみがいたによつてすべく致
す。」

冠者「『要元締めて』とござる。」

ナリ「『要元締めて』とは、かう拡げて、この金でもつてじつと締めるによつて、このことござ
る。」

冠者「『絵はざれ絵』としてござる。」

ナリ「ふん、これく田舎人、これへ寄らつしやれい。えい。」

冠者「なうく、そなたは田舎人ぢやと思つてちやうちやくめさるか。」

ナリ「いや、ちやうちやくではおじやらぬ。こなたと某とかうしてたはむれるをもつて、即ちざれ絵
といひまする。」

冠者「さてもさても、注文に合うてうれしうござる。して、價はいかほどでござるぞ。」

ナリ「高直かつたかにおちやる。」

冠者「幾らほどでござるぞ。」

ナリ「万疋ひゃくでをりやる。」

冠者「これまた高いことござる。ちつとねざりませう。」

ナリ「おう、すこしなどはぬいてやりませう。」

冠者「百ばかりになりませまいか。」

ナリ「なう、そこな人、そのやうな下直げぢかな物ではない。ようお買ひやるまいぞ。」

冠者「まうしまうし、なんと聞かつしやれたぞ。万疋の内をば、百ばかりもぬいて下されまいかとい
ふことござる。」

ナリ「はあ、聞き分けました。五百ぬいてしんじよ。」

冠者「かたじけなうこそござれ。」

ナリ「して、代物だいものはどこで渡さつしやれまする。」

冠者「三條のほてい屋で渡しませう。

ナリ「これで受け取りませう。

冠者「かたじけなうござる。さらばさらば。

ナリ「なう〜。

冠者「なんでかござるぞ。

ナリ「そなたはさだめし主持ちでござる。

冠者「なか〜。

ナリ「人の主はきげんのよいこともあり、またあしいこともある。もし自然^{じぜん}とも、きげんのあしうお

じやるそうば、かうおしやつたが、ようおじやる。

冠者「さてもさても、かたじけなうこそござれ。

ナリ「ようをりやつた。

冠者「やれさて、まづ頼うだ者に、急いでお目にかけうず。殿さま、ござりまするか。

大名「太郎冠者、もどつたか。

冠者「歸りました。

大名「やら、大儀や。急いで見せい。

冠者「はつ。

大名「こりや、なんぢや。

冠者「末廣でござりまする。

大名「これがや。

冠者「はあ、殿さまのおがつてんが参らぬこそ道理でござりますれ。かう致しますると、きつう拵が
りまする。

大名「ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやわいやい。して、おのれは注文に合はして来たか。

冠者「なか〜、合はせましてござる。それで読まつしやれませい。

大名「急いで合はせをろ。まづ『地紙よし』と。

冠者「はあ、それこそ念をつかひましたれ。この紙のこととござる。しはすぎつねのごとく、こんこ
んと言ふほど張つてござりまする。

大名「してまた、『骨みがき』は。

冠者「はつ、この骨のこととござる。信濃とくさをかけてみがいとござるによつて、すべ〜致しま
する。

大名「『要元締めて』は。

冠者「かう拵げまして、この金で締めるをもつて、これが『要元締めて』といふところとござる。

大名「『絵はぎれ絵』は。

冠者「それこそ念のつかひましたれ。それに待たつしやれませい。や、おぼえたか。

大名「や、これは、何をしをるぞ。

冠者「いやまうし、この柄でかうしてたはむれるをもつて、ぎれ絵と申しまする。

大名「やい、そこなやつ。しておのれは知らぬが定か。」

冠者「は、いや、存じませぬ。」

大名「知らずばこれへ寄りをろ。末廣とは屨のこと。これはおのれ、ふるからかさをかうてうせをり、いや『末廣で候』の、『ざれ絵で候』のと某が前へはかなふまい。しさをろ。やれさて、憎いやつかな。」

冠者「まことに頼うだ人の言はるれば、これはさしからかさぢやげなものを。ひよんなことを致した。さりながら、都の者も皆まではぬきませなんだ。きげんなほしを教へてくれた。まづ急いで申してみませうぞ。」

はやし「いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、おれもかささうよ。げたもさあり。やよ、げにもさうよの。いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、おれもかささうよ。げにもさあり。やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。」

大名「いかにやいかにや、太郎冠者。買物にぬかれてはやし物をするとも、前代のくせもの、身が前へはかなふまい。」

冠者「げにもさあり、やよ、げにもさうよの。やよ、げにもさうよの。」

大名「買物にはぬかれたが、まづこちへこげ入つて、うなぎのすしをば、えいやつとほへばつて、よるか酒を飲めかし。」

冠者「げにもさあり、やよ、げにもさうよの。」

大名「何かのことはいるまい。人がかさをささうなら、おれにもかさ着せやれ。」

冠者「ひやろ、ひやろ、ほつばい、ひやろ、ひい。」

十一 涼み台

新星

毎年夏になって、そろ／＼夕方の風がこいしいころになると、物置にしまつてある竹製の涼み台が中庭へ持ち出される。これが持ち出される日は、私の單調な一年じゅうの生活に、一つの著しい区切りをつける重要な日になっている。もう、あしたあたりは涼み台を出そうじゃないかということが、だれかの口から言い出される。しかし、その翌日が雨であつたり、そうでなくてもいろ／＼のことにまざれたりして、つい一日、二日と延びる。そのうちに、いよ／＼さようはということになって、朝のうちに物置の屋根裏から台が取りおろされ、一年じゅうのほこりやかびがぬれどうきんでいぬいにぬぐい清められ、それから裏庭の日かげで乾かされる。そうして、いよ／＼夕方になって中庭に持ち出されると、はじめて私の家にほんとうの夏が来たという心持になるのである。

涼み台のほかに、折り疊みいすが三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集まる。まだ明かいよいよのうちには、なわとびをするものもあれば、写生帳を出しておばあさんのうしろ姿をかいているものもある。明朝咲く朝顔のつぼみを数えて報告するものもある。幼い女児ふたりは、縁側へいろ／＼なお花を並べて、花屋さんごっこをすることもある。暗くなると、花火をしたり、おとぎばなしをした

り、おばあさんに「お國の話」をさせたりしている。幼い子供らには、まだ見たことのない父母の郷國が、おとぎばなしの中の妖精の國のように、不思議な幻像に満たされているように思われるらしい。例えば、郷里の家の前の流れにあひるがたくさん遊んでいて、夕方になると上流の方の飼い主が、小舟で連れに来るといふような、なんでもない話でさえ、何かしら一種の夢のようなものを幼い頭の中に描かせるとみえる。それで、いつも「お國の話」をねだっては、おしまいに「私もお國へ行きたいなあ。」とひとりが言うのと、もうひとりが同じことをくり返すのである。子供らの祖父の若かったころの昔話もしばしば出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いていると、それがもう遠い昔の出来事であつて、数年前まで生きていた私の父に関する話とは思われぬような気がする。まして、祖父を見たことのない、あるいはおぼろげにしか覚えていない子供らには、会津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見る古い歴史の断片のようにしかひびかないであらう。そうしてそれだけに、かえつて祖父に対する懐かしみは淨化され、純化されて、子供らの頭の中の神殿に納められるのであらうと思われる。

ことしの夏、涼み台が持ち出されてまもなく、長男が、よいのうちに南方の空に輝く大きな赤みがかった星を見つけて、あれは何かと聞いた。見ると、それは黄道に近い所にあるし、ちら／＼また／＼きをしないから、いずれ遊星には違ひないと思つた。そうして、近刊の天文の雑誌を調べてみると、それが火星だということがわかつた。星座図を出して来てあたつてみると、それは処女宮の一等星スピカの少し東にあるということがわかつた。それで、その図の上に鉛筆で現在の位置を記し、そのわきへ日附を書いておいて、この夏しゅうのこの遊星の軌道を図の上で追跡してみようということにした。

それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座図を出して、目だつた星宿を見比べていた。そのころは、まだ、織女や牽牛はよいのうちには、かなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が、屋根越しに、氷のような光を投げていた。

空をながめているうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜じゅう空を見張っている話をして、それから新星の発見に関する話もして聞かせた。おもだつた星座を暗記していれば、しろうとでも新星を発見し得る機会はあるということも話した。

一秒間に二十九万九千キロを走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるような、ばくだいな距離を隔てて散布された天体の二つが、偶然接近して新星の発現となる機会は、例えば釈迦の引いた比喩の、めくらのかめが百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機会にも比べられるほど少なそうであるが、天体の数のばくだいなために、新星の出現はそれほど珍しいものではない。たゞ光度の著しく強いのが割合にまれである。

こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が数百年の過去のものだということであつた。わが家の先祖のだけれが、どこかでどうかしていたと同じ時刻に、遠い／＼宇宙の片すみに突発した事変の報知が、やつと今の世にこの世界に届くということである。

八月になつてから、雨天や曇天がしばらく続いて、涼み台も片すみの戸袋に立てかけられたまゝに幾日もたつた。

ある朝、新聞を見ていると、ことし卒業した理学士某氏が流星の観測中に白鳥星座に新星を発見したという記事が出ていた。その日の夕方涼み台へ出て、子供とともにその新星をさがしたら、すぐわか

った。しばらく見なかった間に季節が進んでいることは、織女・牽牛がよいうちに、ま上に來ているのでも知られた。そうして、新星はかなり、天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争うほどに輝きまた、いっているのであった。

「しばらくなまけたので、新星の発見をしそこなつたね。」

と言つたら、子供はどう思つたか、顔をまっかにして、そうして、さもおもしろそうに笑つていた。私はじょうだんのつもりで言つたのだが、子供には私の意味がよくわかるまいと思つた。それで、誤解をしないために次のような説明をしておかなければならなかつた。

新星の出現する機会は、きわめて少ない。われ／＼しろうとが星座の点検をする機会も、またはなはだ少ない。したがつて、まず新星が現われて、それからわれ／＼かそれを発見するという確率は、二つの小さな分数の相乗積であるから、つまりごく小さい物のまた小さい分数に過ぎない。これに反して毎晩欠かさず空の見張りをしている専門家にとっては、「偶然」はむしろおもに星の出現というこのみにあつて、われ／＼の場合のように、星と人に関する二重の「偶然」ではない。しいて言へば、天氣の晴れ曇りや日常の支障というような、偶然の出來事のために、一日早く見つけるかどうかということが問題になるだけであろう。

そのうちに、また曇天が続いて、朝晩はもう秋のこゝちがする。どうかすると、夜風は涼し過ぎる。涼み台もつい忘れられがちになつた。したがつて、星のことももう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の変化を研究すべき天文学者の仕事はこれから始まるので、学者たちは毎晩曇つた空をながめては、晴れまを待ち明かしていることであろう。

線香花火

夏の夜に、小庭の縁台で子供らのもてあそぶ線香花火には、大人の自分も強い誘惑を感じる。これによつて、自分の子供の時代の夢がよみがえつて來る。今はこの世にない親しかった人々の記憶がよび返される。

はじめ先端に点火されて、たゞかすかにくすぶつてゐる間の沈黙が、これを見守る人々の心を、まさに来たるべき現象の期待によつて緊張させるに、ちょうど適当な時間だけ継続する。次には火薬の燃焼が始まつて、小さなほのおがぼたんの花弁のように放出され、その反動で全体は振子のように揺れ動く。同時に、しゃくねつされた溶融塊の球がだん／＼に成長して行く。ほのおがやんで、次の火花の段階に移るまでの短い休止期が、また名状しがたい心持を興えるものである。火の球はかすかな、物の煮えたぎるような音をたてながら、こまかく振動している。それは、今にもほとぼしり出ようとする勢力が、内部にうずまいてゐることを感じさせる。突然、火花の放出が始まる。目にもとまらぬ速度で発射される微細な火弾が、目に見えぬ空中の何物かに衝突してくだけでもするように、無数の光の矢束となつて放散する。その中の一片は、また更に碎けて、第二の松葉、第三、第四の松葉を展開する。この火花の時間的ならびに空間的の分布が、あれよりもっとまばらであつても、あるいは密であつてもいけないであろう。実に適当な歩調と配置で、しかも十分な変化をもつて火花の音楽が進行する。この音楽の速度は、だん／＼に早くなり、密度は増加し、同時に一つ／＼の火花は短くなり、火の矢の先端は力弱く垂れ曲がる。もはや爆裂するだけの勢力のない火弾が、空氣の抵抗のためにそ

の速度を失って、重力のために拋物線を描いて垂れ落ちるのである。私の母は、この最後の段階を「散り菊」と名づけていた。ほんとうに、單弁のさくのしおれか、ったような形である。「ちりぎく、ちりぎく、ちりぎく。」こう言ってはやして聞かせた母の声を思い出すと、自分の故郷における幼時の追憶が、鮮明によび返されるのである。あらゆる火花の勢力をはき盡した球は、もろく力なくぼとりと落ちる。そうして、この火花の音楽の一曲が終るのである。あとに残されるものは、あわくはかない夏のよいやみである。

実際、この線香花火一本の燃え方には「序破急」があり、「起承轉結」があり、詩があり、音楽がある。ところが、近代になってはやりだした電氣花火とかなんとか花火とか称するものはどうであろう。なるほど、アルミニウムだか、マグネシウムだかの閃光は、光度において大きく、ストロンチウムだか、リチウムだかのほのおの色は美しいかも知れないが、はじめからおしまいで、たゞぼう／＼と無作法に燃えるばかりで、ひょうしもしなければ律動もない。それでまた、あの燃え終りのきたなさ、曲のなさはどうであろう。

線香花火のしゃくねつした球の中から火花が飛び出し、それがまた、二段、三段に破裂するあの現象が、いかなる作用によるものであるかということとは、興味ある物理学上ならびに化学上の問題であつて、もし、くわしくこれを研究すれば、その結果は、自然にこれらの科学の最も重要な基礎問題に触れて、その解釈はなんらかの有益な貢献となり得るみこみがかなりに多くあるだろうと考えられる。それで、私は十余年前から、多くの人にこれらの研究を勧誘して來た。特に、十分な研究設備を持たない人で、何かしら独創的な仕事がしてみたいというような人には、いつでもこの線香花火の問題

を提供した。しかし、きょうまで、まだ、だれもこの仕事に着手したという報告に接しない。結局、自分の手もとでやるほかはないと思つて、二年ばかり前に少しばかり手を着けはじめてみた。ほんの少しやってみただけで得られたわずかな結果でも、それははなだ不思議なものである。少なくとも、これが、將來一つの重要な研究題目になり得るであろうということを、認めさせるには十分であつた。このおもしろく有益な問題が、從來、だれにも手を着けられずに放棄されている理由が、自分にはわかりかねる。おそらく、「文献中に見当たらない。」即ちだれもまだ手を着けなかつたということ以外に、理由は見当たらないように思われる。しかし、人がかえりみなかつたということは、この問題のつまらないということには決してならない。

(寺田寅彦の文による)

中等國語
一
(1)

昭和二十二年二月六日印刷 同日鐫刻印刷
昭和二十二年二月十日發行 同日鐫刻發行
〔昭和二十二年二月十日 文部省檢査済〕

定價

著作權所有 著者兼 發行者 文 部 省

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Feb. 6, 1947)

鐫刻者 東京神田区岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

代表者 阿部眞之助

印刷者 東京都牛込区市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社

代表者 佐久間長吉郎

發行所 中等學校教科書株式會社

廣島大学附属中学校
P.T.A.
昭和 年 月 日

広島大学図書

0130449564

